

## 未来の二つの顔：宇宙が開く人類の生物＝文化多様性への扉

大村敬一（大阪大学）

※この発表は『宇宙人類学の挑戦』（昭和堂、2014年）の序章と第4章のダイジェストです。

### 1 二枚の写真からの問い：「クオ・ヴァディス・アントロポス？（人類よ、いずこに行きたもう？）」

#### 1-1 二つの写真：20世紀人類史の最大の事件の一つ。

##### (1) The Blue Marble（青いビー玉）（NASA: AS17-148-22727）

- ・1972年12月07日、アポロ17号の乗組員によって地球からおよそ4万5千キロメートルの距離から撮影された地球全体の写真。
- ・人類が全球で完全に輝く地球を史上はじめてとらえた写真（宇宙飛行士が太陽を背に撮影）。
- ・衛星軌道上からは地球を全球としてとらえることはできない。第2宇宙速度で地球引力圏を離脱して地球から遠距離をとってはじめて可能。

##### (2) Earthrise（地球の出）（NASA: AS8-14-2383）

- ・1968年12月24日、アポロ8号の乗組員が月周回軌道上で撮影。
- ・月面地平線から地球が昇る像をとらえた史上2枚目、人類が直接撮影したはじめての写真。  
（はじめての「地球の出」の白黒写真は1966年のルナ・オービター1号）

##### (3) この二枚の写真：アポロ計画最大の成果の一つ、20世紀人類史における最大の事件の一つ。

- ・「地球」に対する新たなイメージ：無限に広がる闇に孤独に浮かぶ脆くも美しいオアシス。

#### 1-2 二つの写真が私たちに問いかけること

##### (1) 70年代という時代：この2枚の写真が人類の想像力に与えた二つのヴィジョン。

###### (i) 内側へ向かう眼差し：たった一つで有限の生存圏である地球を持続的に守らねばならない。

→「真っ赤な地球」：環境運動、持続可能性、宇宙船地球号

###### (ii) 外側へ向かう眼差し：この小さな球に私たちは留まりつづけるのか？

→「フロンティアとしての宇宙」：スペース・コロニー、ニュー・タイプ、新たな人類と生活圏

##### (2) あれから40年：今21世紀のこの時に。

- ・人類が宇宙に進出してすでに半世紀。
- ・1989年に東西冷戦が終わり、グローバリゼーションの時代が幕を開け、一つの地球という意識が浸透。
- ・しかし、また同時に、なくなならない南北格差と低強度紛争、破産する「持続可能性」、グローブとして客体化された地球という限界の意識化からの閉塞感。すでに1970年代に「地球」を客体化してしまった私たちに、この「限られた舞台」というイメージからもはや逃げることはできない。その「限られた舞台」でどこまで奪い合い、殺し合えばよいのだろうか、というそこはかたない閉塞感。
- ・他方、いまだ人類の宇宙進出は太陽系内どころか地球圏近傍にとどまっており、月ですらいまだ遠いとはいえ、すでに私たちの生活はすでに宇宙開発なしには考えられない状態になっている。
  - ・グローバリゼーションという今日の状況：宇宙空間に張り巡らされた人工衛星のネットワークなしには成立しえない。
  - ・コンピュータ技術や材料工学技術をはじめ、宇宙開発技術の民生化：ありふれた日常生活品として私たちの周りに溢れている。
- ・技術的にもはや宇宙への進出は不可能ではない（いろいろ問題はあがるが…）。
- ・民間の宇宙開発の実現に向けた活発な動き（e.g., Space Ship 1, 2, Mars 1 Project）
  - ・宇宙開発が国家の威信を賭けた国家事業であった時代が終演を迎え、民間主導の爆発的な成長の時代を迎えつつあるのかもしれない。
- ・宇宙に向けた人文社会科学の胎動
  - ・「宇宙空間における人類」シンポジウム：2007年にヨーロッパ科学財団（ESF）やヨーロッパ宇宙政策機構（ESPI）などが今後50年の人類の宇宙進出について考察するために人文社会科学の研究者を招いて開催した学際シンポジウム。
    - ・「宇宙空間における人類に関するウィーン構想」（The Vienna Vision on Humans in Outer Space）の採択。
    - ・Codignola, L. & K.-U. Schrogl (eds.) 2010 *Humans in Outer Space: Interdisciplinary Odysseys*. Springer.

・Landfester, U., N.-L. Remuss, K.-U. Schrogl & J.-C. Worms (eds.) 2011 *Humans in Outer Space: Interdisciplinary Perspective*. Springer.

・JAXA が機構内に人文社会科学部門を創設。

(3) そして、今、あの2枚の写真が私たちに問うこと：この時代にあつて改めて私たちが私たち自身についての次の問いに向き合わねばならないのではないのか？

「クオ・ヴァディス・アントロポス？ (Quo Vadis, Anthropos?)」(人類よ、いずこに行きたもう?)

※注意：ただし、これは「宇宙にゆくべきだ」ということでも、「行くべきでない」ということでもない。「どこに向かうか？」を正面から問う時代がやってきたのではないかという問題提起であり、決めるのは人類全体である。

### 1-3 人類の宇宙進出：人類学にとっての重要課題の一つ

(1) 人類学の根本的な問い：「人類とは何か？」すなわち「人類はどこからやってきて(過去)、どのような存在であり(現在)、どこに行こうとしているのか(未来)」を問うことで人類の可能性と限界について考える。

(2) フィールド哲学としての人類学の方法：ハイパー・マイクロなフィールドワークの場(人々の日常生活の場)で「人類とは何か？」というハイパー・マクロな問いについて哲学する。

e.g., 大村はカナダ極北圏の先住民であるイヌイトのフィールドワークを通して人類について考える。

・「人々について知りたければ、身のまわりを見まわす方がよい。だが人間を知ろうとするなら、遠くを見ることを学ばなければならない。共通の本性を発見するためには、まず差異を観察する必要がある。」(Rousseau 1970: 89)

(3) 人類の宇宙進出という主題

①人類学の根本的な問いの一つ、「人類はどこに行こうとしているのか」という人類の未来の可能性と限界の探求。

②宇宙での人類の日常生活のフィールドワークを通じた人類の可能性と限界の探求。

(4) 宇宙人類学の動き

・岡田浩樹・木村大治・大村敬一編 2014 『宇宙人類学の挑戦』昭和堂。

・日本文化人類学会における宇宙人類学部門の発足、JAXA との共同研究。

・Battaglia, B. ed. 2005 *E.T. Culture: Anthropology in Outerspaces*. Duke University Press.

・Valentine, D., V. Olson & D. Battaglia eds. 2012 *Extreme: Humans at Home in the Cosmos*. (Special Collection) *Anthropological Quarterly* 85 (4): 1007-1160.

・ヴァッタグリアラ人類学者が「宇宙空間における人類」シンポジウムに参加。

・学際シンポジウム *Lunar Settlement* (2010) への人類学者の参加 (Masali, M., M. Ferrino, M. Argenta & M. Cremasco 2010 *Anthropology: Physical and Cultural Adaptation in Outer Space*. In H. Benaroya ed., *Lunar Settlements*. pp. 165-174, CRC Press.)。

### 1-4 来たるべきときに備えて：この発表の目的と方法

(1) 目的：人類の過去と現在と未来を問う人類学という学的営為の延長線上で、人類が宇宙に進出したとき、そこにどのような可能性が潜んでいそうなのか、実験的に探求し、そこでの人類学の任務について考える。

※注意：ただし、人類が宇宙に進出するかどうかは未知数。それを決めるのは人類全体である。

(2) 方法：人類の宇宙進出を人類の進化史的基盤、とくに人類の認知能力に位置づけて人類の宇宙進出をとらえ、そこから人類の宇宙進出の未来について推定する。

①現生人類の認知能力の進化史的基盤(他の生物種にない特徴)を概観

②現生人類の現状の概観

③宇宙での人類の展開の想定

④宇宙での人類学の任務。

## 2 人類の進化史的基盤：精神の自在で多重的な延長

### 2-1 「拡張する精神」：認知人類学が明らかにした人類の精神の過程

\*「拡張した心」(cf クラーク 1997, 2012)、「状況認知」(cf レイヴ 1995; Lave 2011)、「分散認知」(cf Hutchins 1996)

(1) 人類の精神は人類個体の脳もしくは身体の内側に閉じ込まれているわけではなく、様々な道具や協働する人々、改変された環境を巻き込む人間と非人間(モノ)のハイブリッドなサーキット(回路)として成立する。

(2) 事例：木こりの精神、自転車に乗る人の精神、飛行機のパイロットの精神、計算する人の精神。

### 2-2 現生人類の進化史的基盤：精神の拡張回路の意識的な多重性と自在性

\*「累進的な文化進化」(トマセロ)、「学習進化モデル」(ベイトソン)、「パッケージ学習進化仮説」(大村)

(cf 大村敬一 2014 「パラドクスに潜む人類の秘密」『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』大阪大学出版会)

(1) 人類の精神(認知過程)だけが拡張するわけではない。どんな生命体も周囲の環境を巻き込んだサーキットを形成して自己の精神(認知過程)を環境に拡張する。

- ・「行動と呼ばれるものは、自分の身体を越えた、有機体内の活動の延長として考えられる。行動に関するかぎり、それは外部のサーキットをつかっただけの生理学的活動である。これと相関して、生理学的活動は内的環境における行動である。」

(Merleau-Ponty 1995: 234)

## (2) 現生人類の特徴：精神の拡張回路の意識的な多重性と操作性

- (i) 精神の拡張回路の背後に、その回路の意図（目的）を読み取る。←「心の理論」をもつ能力。
- (ii) その意図ごとに精神の拡張回路を客体化（対象化）して、目的ごとにパッケージ化。←自己と環境の関係を客体化する能力。
- (iii) 目的ごとにパッケージ化された回路を組み合わせて次々と接ぎ木したり、組み合わせなおしたりする。

## (3) 回路の意識的な多重化と操作化の帰結。

- (i) 空間上の帰結①：どこまでも際限なく拡張に拡張を重ねる多重延長生命体。
  - グローバリゼーション。
  - ・道具をつくる道具をつくる道具をつくる道具をつくる…∞?（他の生物は道具使用まで）。
  - ・多重分節で再帰的な言語：音素、形態素、語、文（再帰的モジュール化）、ターンや語り…。
  - ・その他、生きることのあらゆる領域で拡張に拡張を重ねる。
  - ・多様な社会・文化やグローバル・ネットワークが多重に共存。
- (ii) 空間上の帰結②：生物種として同一なまま、極北圏から赤道直下まで地球上のほぼすべての環境に適応。
  - 多様な社会・文化。
  - ・モノを動員しつつ複数個体が協働することで構築された人間とモノのハイブリッドなネットワーク（「社会・文化」）によって、生物個体では実現不可能な認知能力や技能を創発的に実現し、それらによって身体形質を変えることなく多様な環境に適応することができた。
- (iii) 時間上の帰結：累進的な文化進化
  - 他の生物種に見られない人類の認知技能の爆発的な進化。
  - ・パッケージ化された回路を次々と改良したり繋げたり組み合わせ直したりすることで、社会・文化やグローバル・ネットワークを累進的に進化させる。
  - 通常の生物学的な進化のプロセスでは達成するにはあまりにも短い25万年という時間で、現生人類は他の動物種が達成することがなかった認知技能を発達させてきた。
    - e.g., 高度な道具使用をとまなう産業や技術、記号による複雑な伝達や表象、複雑な社会組織や制度など。

## 3 現生人類の現状：グローバル・ネットワークと社会・文化の多様性という二つの顔

### 3-1 グローバリゼーション ←空間上の帰結①

- (1) 精神の拡張回路の多重的な連鎖が全地球を覆うように拡張。
  - ・全地球上に張り巡らされた物流網に支えられた巨大な産業複合体（道具をつくる道具をつくる道具をつくる…∞）。
  - ・地球上から衛星軌道上に張り巡らされた通信ネットワーク（言語や文字をはじめとする情報回路の多重的な延長）
  - ・全地球上に張り巡らされた交通ネットワークなどなど。
- (2) 現在、さらに宇宙に向けて拡張。
- (3) 問題点も多いが、現生人類が実現した偉大な到達点の一つ。
  - (i) 問題点
    - ・富める者はますます富み、貧しき者がますます貧しくなるという全地球規模で進展する政治・経済的な格差
    - ・言語や社会・文化の多様性の抑圧と根絶、生活様式や価値観の均質化。
    - ・地球環境の破壊など。
  - (ii) 成果
    - ・物流に支えられた豊かな生活。
    - ・70億にも達する人々をつなげ、人びとの交流をかつてないほど促進。
    - ・認識の地平の拡大。さらには、人類の精神を宇宙にまで拡張。

### 3-2 社会・文化の多様性 ←空間上の帰結②

- (1) グローバリゼーションの状況下でも、欧米を中心とするグローバル・ネットワークと多様な広域ネットワークが多重に共存。e.g., イスラムのネットワークや華僑のネットワークなど。
- (2) それぞれの地域の多様な環境に局所的に適応した精神の拡張回路（社会・文化）がグローバル・ネットワークと共存。e.g., イヌイトの生業システムという精神の拡張回路。

### 3-4 多重に生きる：極北の先住民イヌイトの場合

(cf 大村敬一 2011「大地に根ざして宇宙を目指す」『現代思想』39(16): 153-169。大村敬一 2013「ムンディ・マキーナとホモ・サ

ピエンス』『現代思想』42(1): 134-147)

- (1) 今日のカナダ・イヌイト社会はグローバル・ネットワークに呑み込まれている。
  - ・産業資本制の世界システムとカナダという近代国民国家体制に統合。
  - ・生業（狩猟・漁労・罨猟・採集）の機械化と兼業ハンターの一般化。
  - ・生活様式全般の近代化、欧米化。
- (2) しかし、今日のイヌイトはグローバル・ネットワークに完全に同化されてしまったわけでも、イヌイトとしての自信と誇りを失ってしまったわけでもない。
  - ・「イヌイトの文化は過酷な極北の環境で栄えてきたし、これからもグローバルな環境のもとで成長し、栄えてゆくことだろう。その中で変わらずに残ってゆくもの、過去と現在と未来を繋ぐものは、コミュニティとの一体感、互いにすすんでどこまでも助け合う精神、進取の気概と機知に富むこと、要するにイヌイトであること、つまり人間であることである。」(GN 1999: 1) (カナダのヌナヴト準州政府のイヌイトの官僚、ジェイビーティー・アグナカクのことば)
- (3) グローバル・ネットワークと共存して維持される生業システム
  - (i) 生業システム
    - ・実現すべき世界として表象された世界観によって律せられ、イヌイトの社会・政治関係の基礎的な単位である拡大家族集団を生成して維持する一連の諸活動を通して、食料が獲得、分配、消費されるシステム。
    - ・このシステムを通してイヌイトの精神は「大地」(nuna) に拡張。
      - 「大地」：イヌイトと野生生物からなる極北圏の生態系。
  - (ii) 生業システムの仕組み
    - ①イヌイトが野生生物を誘惑。
    - ②野生生物が誘惑にのって自らの身体をイヌイトに与える。
      - (=野生生物からイヌイトへの命令：「我が身体を<食べ物>として分かち合え！)」
    - ③野生生物の命令に従って、イヌイトたちが「食べ物」を分かち合う。
    - ④イヌイトたちの協働。(=イヌイトの間での信頼と協調の社会関係の発生)
    - ⑤イヌイトたちの間で野生生物を誘惑するための戦術的な技を共有して錬磨。
    - ⑥①に戻る。
  - (iii) イヌイトの精神の「大地」への拡張(大地との絆)
    - ・イヌイトの精神は、複数の野生生物との関係を通して極北の生態系に拡張し、「大地」という人間と非人間(野生生物)のネットワークの結節点の一つとして溶け込む。
  - (iv) 生業システムを通じた大地との絆の特徴：生業が循環的に実践される限り自律的に閉じつつ外部に開いた系。
    - ①それぞれの野生生物種との関係とイヌイト同士の関係は循環的に閉じた系になっており、その閉じた系の中で、食べものをはじめとする生活資源の獲得から社会関係の調整にいたるまでの政治・経済のすべて、つまり生活のすべてが自律的に賄えるようになっている。
    - ②野生生物との関係とイヌイト同士の社会関係が循環的に生成するならば、外部から何でも取り入れつつ自らを持続的に維持することができる。
      - ・高性能ライフルやスノーモービルなどの機械類が導入されたり、ハンバーガーなどの加工食品が食べられるようになったりしても、生業の循環が途絶えることがなかったために、様々な文化の変化を経てもなおイヌイト社会の継続性が保たれてきた。

### 3-5 まとめ：人類の精神の拡張回路二つの顔

- (1) グローバル・ネットワークや複数の広域ネットワークによって全地球にまで拡張する回路という顔。
- (2) 地球上の多様な環境に根ざした局所的な回路という顔。

## 4 宇宙が加速する多様性：現生人類の精神の多重拡張能力への挑戦

### 4-1 問い：こうした二つの顔をもつ人類の精神の拡張回路は宇宙ではどうなるのか？

- (i) 地球という特殊な環境で進化した現生人類は、その精神の拡張能力をもってどこまで宇宙でやっつけられるのか？
- (ii) 宇宙という新たな環境で、現生人類の精神の拡張回路はどこまで多様になってゆくのか？
- (ii) 宇宙という新たな場から人類の可能性と限界を明らかにする。

### 4-2 宇宙空間という環境

- (1) 現生人類がこの約25万年で適応してきた地球環境とはえらく違う環境。
- (2) 無重力、無空気、超低気圧、超極端な温暖差、宇宙線、太陽風、無食料。

- ・生物学的に最低限必要な資源がなく、宇宙線が降り注ぎ、太陽風に晒される宇宙空間では、人類という生物種が生存すること自体が至難。
- ・宇宙酔いなどの感覚器官の混乱、骨格や筋肉の退化など、生体組織に甚大な影響。
- ・無重力で空気のない宇宙空間では、人類の認知能力や身体技能は攪乱され、モノ一つ動かすにもねじ一本締めるにも、地球上とは異なる技能が必要。

#### 4-3 すではじまっている宇宙進出

- (1) グローバル・ネットワークの拡張回路は宇宙に向かってすでに拡張。e.g., 月面有人探査、ミールやISS。
- (2) 新たな精神の拡張回路の開発
  - ・ミールやISSの内部で身体を動かしたり、道具などのモノを整理したり操作したりするために、微少重力下の環境に適応したやり方が新たに工夫。
  - ・閉鎖的な無重力の環境に適応した協働や共住やユーモア、国籍にとらわれない社会関係、
- (3) ただし、現状においては、ISSをはじめとする地球軌道上での人類の精神の拡張は、あくまでも地球を基点にグローバル・ネットワークの延長。
  - ・ISSでの人類の活動：生存に必須の資源の運搬をはじめ、航行の管制や様々な活動の支援など、宇宙空間での活動は地球上のグローバル・ネットワークの支援なしには成り立たない。

#### 4-4 想定される事態：もし人類の宇宙進出がつづいたら？

- (1) 多様な環境に局地的に適応した多様な精神の拡張回路の発生。
  - ・地球を基点に宇宙に拡張してゆくネットワークを足がかりに、惑星や小惑星や衛星などの多様な環境と出会った先々で、それぞれの環境に適した多様な回路を生み出してゆく。
- (2) 生物学的な身体形質の変化。
  - ・宇宙空間で世代が交代した場合、人類の身体がそうした環境に適応して変化してしまう可能性。
- (3) これまでにない多様性の開花：生物学的な多様性と社会・文化の多様性が相乗的に複合した生物＝社会・文化的な多様性の爆発。→ 宇宙に誕生する人類は私たちには奇怪で不気味にみえるかもしれない。
  - ・宇宙の多様な環境への適応は、地球上の様々な環境への適応とは異なって、身体外部に脱着可能な精神の拡張回路だけでなく、身体形質それ自体にも変化をもたらす。
  - ・人類が自らの身体形質を変化させる可能性 ← 遺伝子操作、サイボーグ医療など。
  - 人類の生存可能性の増大（地球上での社会・文化の多様性が達成した以上に）
- (4) 新たな問題の発生：
  - (i) 奇怪で不気味なほどに多様化した人類は、果たして私たちと同じ人類か？それとも新たな生物種か？
  - (ii) 奇怪で不気味なほどに多様化した人類の交流の可能性をいかに確保するか？
- (5) ある一つの暫定的な解：
  - (i) 今日、宇宙にまでに拡張しつつあるグローバル・ネットワークが奇怪なほど多様化した人類（もしくは新人類）をつなぐ架け橋になるかもしれない。
  - (ii) そうした爆発的な多様性を糧に、ネットワークはさらに太陽系外に人類が進出する際の足がかりを提供するかもしれない。

#### 4-5 想定されるシナリオと人類学の任務：「宇宙空間における人類に関するウィーン構想」に基づいて

\* 「宇宙空間における人類に関するウィーン構想」：ヨーロッパ科学財団（ESF）やヨーロッパ宇宙政策機構（ESPI）などが今後50年の人類の宇宙進出について考察するために人文社会科学の研究者を招いて開催した学際的なシンポジウムで採択。

##### (1) 第I段階（第一次オデッセイ期）

- (i) 地球衛星軌道で活動が行われる段階（すではじまっている）。
- (ii) ウィーン構想：
  - ・宇宙空間での活動に関する様々な技術的な問題への取り組み。→ 派生的効果：地球上の問題の解決にも貢献。
  - ・国民国家を超えた地球人としての意識が高まり。
  - ・ISSなどの運営を通じた新たな協働関係。
  - ・宇宙空間での活動をめぐる法の整備 → 宇宙空間の平和利用と宇宙における人権を推しすすめる方法の模索。
- (iii) 地球上に張り巡らされたグローバル・ネットワークの延長線上で第II段階と第III段階の準備。
  - ・生物＝社会・文化の多様性が花開くための苗床の育成。
- (iv) 人類学の任務：第II段階と第III段階の準備。
  - ・ISSなどの地球軌道上の宇宙基地で隣接分野の心理学や医学や生物学と協力しながらフィールドワークを実施。
  - ・新たな精神の拡張回路を記述・分析

- ・精神の拡張回路と生物学的な身体形質の変化の可能性と限界の探求。

## (2) 第Ⅱ段階 (第二次オデッセイ期)

- (i) 第Ⅰ段階を足がかりに地球外に探検が行われる段階。
- (ii) ウィーン構想：
  - ・探検を経て様々な発見がなされ、新たなエネルギーなどの資源開発がすすむ。
  - ・探検での国民国家を超えた協働の必要性や法整備を通した新たな社会関係の構築。
- (iii) 第Ⅰ段階の延長線上でグローバル・ネットワークが宇宙に拡張し、人類の生物＝社会・文化の多様性の苗床の整備がすすむ。
  - ・長距離の探検に伴って宇宙での活動は長期間に。
  - ・その活動を支えるロジスティックにもある程度の自律性。
  - ・ただし、活動は依然として地球を基点とするネットワークの延長線上。
- (iv) 人類学の任務：第Ⅲ段階の準備。
  - ・地球外への探検隊に参加してフィールドワークを実施（第Ⅰ段階の場合と同様の調査）
  - ・どのような精神の拡張回路が開発され、人類の身体形質にどのような生物学的な変化が生じるか？

## (2) 第Ⅲ段階 (第三次オデッセイ期)

- (i) 惑星や小惑星や衛星などに人類が移住をはじめ、地球外で子どもが誕生することではじまる。
- (ii) ウィーン構想：
  - ・何らかの地球外生命体と遭遇するとともに新たな環境に適応。
  - ・人類の生活様式はもとより、信念や価値観に決定的な変化。
  - ・人文社会科学による調査と研究が本格化。
- (iii) 人類の生物＝社会・文化の多様性の芽吹きと爆発、人類の生存可能性の飛躍的増大。
  - ・それまでの二つの段階で整備されたネットワークを苗床に。
  - ・多様な環境に人類が住み着き、そこで誕生した子どもたちが育つ。
  - ・地球を基点とするネットワークとは接続を保ちつつも、そこから自律した生活。  
e.g., ラグランジュ・ポイントのスペース・コロニー、火星、小惑星、月や外惑星の衛星。
  - ・これまでにないほどの生物＝社会・文化の多様性の爆発。
  - ・人類の生存可能性の増大（地球上での社会・文化の多様性が達成した以上に）
- (iv) 人類学の任務：
  - ・太陽系各所に新たに芽吹く生物＝社会・文化でのフィールドワークの実施。
  - ・移住先でどのような生物＝社会・文化が築かれてゆくのかを調査・分析することで人類の可能性と限界を探る。
  - ・多様な生物＝社会・文化に、太陽系外のさらに多様な環境に人類が適応してゆく可能性を探る。
- (v) 人類学に突きつけられる新たな問い：
  - ・人類とは何か？ 奇怪なほどに変異を遂げた人類は人類か、他の生物種か？ という問い。  
← 太陽系の様々な環境に適応した人類は、今の私たちの目には人類には見えないほど奇怪で不気味な姿に変貌。
  - ・奇怪で不気味なほどに多様化した生物＝社会・文化の間の交流を維持するにはどうすればよいのか？  
→ 一つの候補：現在、地球から宇宙に拡張しだしているグローバル・ネットワーク。
  - ・地球外生命体と出会うことで、以上の二つの問いの先鋭化。

## 5 未来の二つの顔：宇宙が開く生物＝社会・文化多様性への扉

### 5-1 未来の二つの顔 (←人類の認知能力の進化史的基盤と人類の現状)：

- (1) 太陽系に、さらには太陽系外に向かって驀進するネットワークという顔。
  - ・現在のグローバル・ネットワークの延長線上にある未来の顔。
  - ・奇怪で不気味なまでに多様化した生物＝社会・文化を繋げる交流の架け橋。
- (2) ネットワークを苗床に花開いてゆく生物＝社会・文化の多様性という顔。
  - ・かつてないほどの多様性の爆発。
  - ・人類の生存可能性の増大（地球上での社会・文化の多様性が達成した以上に）
  - ・新たな問いの発生：「人類とは何か？」、「奇怪なまでに多様化した生物＝社会・文化の交流をいかに維持すればよいのか？」

### 5-2 宇宙における人類学の任務：人類の未来の二つの顔の維持

- (1) 宇宙において爆発する人類の多様性に人類の可能性を見出す。
  - ・生物＝社会・文化的に多様に分岐した人類の姿は、私たちの目には同じ人類に映らないほどに奇怪で、その姿に私たちは嫌悪

感を抱くかもしれない。

- ・しかし、25万年前に誕生した私たちの祖先が現在の私たちの姿を見れば、同じように感じるのではあるまいか。
- ・むしろ、現在の想像力を遙かに超えて、おぞましいまでに変異してゆくことにこそ、人類の可能性があるのではないか。
- ・精神を多重かつ自在に拡張する能力を駆使し、多様な環境に局地的に適応する精神の拡張回路を開発することで、驚くほどの多様性を実現してきたからこそ、私たち人類は全地球の多様な環境に拡張することができたのではあるまいか。

(2) その多様性の増殖の中にあってもなお、多様化した人類（あるいは新人類）が相互の差異を超えて交通する可能性を探る。

- ・私たちが想像するよりも遙かに困難なことであるかもしれない。
- ・しかし、そうしたより困難な任務に取り組むことで、人類学は「人類はどこから来て、どのような存在であり、どこに向かうのか」という人類の過去と現在と未来を問う学問として真に成熟してゆくのではないだろうか。